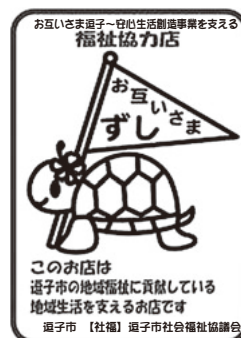


買い物支援が必要な方に、「見守りサポーター（地域の中で見守りを行う支援者）」を介して情報提供したり、時に利用者とのつなぎを行っています。



(写真右)「福祉協力店」の目印となるステッカー
(写真左)「見守りサポーター」が戸別訪問し、困りごとを聞き取ります

この宅配では、単なる配達だけでなく、宅配をしながら利用者を見守ったり、緊急時には速やかに連絡をとれるような体制を講じています。住民による見守りサポーターに、宅配を行う地元商店の見守りも加わり、安心できるしくみが重層的に作られています。

【地元商店との距離を縮める「ICT」】

一方、南足柄市では、市と市社協が連携して、自宅近くに商店がなく、自

家用車など交通手段も持たないために、食料品などの日常の買い物に苦労している高齢者世帯を対象に、タブレットPC（液晶ディスプレイを持ち運び可能にした、タッチパネル方式などの携帯用コンピュータ）等を活用した買い物支援を十一月から試行しています。高齢者の自宅にヘルパーが訪れて注文を入力し、商品を市内八店舗から運送会社が集め、翌週に配達をするというしくみです。

「ICT」とは「Information and Communication Technology」の略で、IT（情報技術）に加えて「コミュニケーション」が具体的に表現されている点に特徴があるといわれます。このICTを活用した取り組みでは、単身者の居室内にセンサーを設置し見守りをする例など有名です。

買い物の分野でも、ネットスーパー（店頭で販売する商品をインターネットで注文・宅配するしくみ）の利用が大きく伸びる中、インターネットになじみがない高齢者に使いやすい、タッチパネル方式の情報端末を地域の拠点に設置したり、テレビを活用して注文できる取り組みが試みられており、ICTの活用は今後ますます注目されると思われます。

地域の交通機関と足並みをそろえた移動支援「デマンドバス」

県西部にある松田町は総面積のう

ち、約九四％が山間部に囲まれた自然の溢れる町ですが、公共交通の不便な地域があることから、「町地域公共交通会議」を通して、新たな交通体系のあり方について検討を行ってきました。

その結果、ニーズの多かった朝晩の送迎や、買い物・病院・バス停までの送迎などを行うために、「デマンドバス」の運行を開始しました。このバスは公共交通機関の補完を目的とし、自動車を運転できない子どもや高齢者などの移動の利便性を図る一方で、既存の路線バスを経営的に圧迫して交通空白が拡大しないよう、既存路線との共存を図りながら住民ニーズに応じた運行を行っています。

地域の基盤支援の視点をもった見守り活動を目指して

このように、本県ではさまざまな取り組みに着手し始めたところですが、買い物支援の取り組みには、地元商店と連携し、活用しながら取り組んでいるところに特徴がみられます。今後、地域の暮らしを持続可能なものにしていくためには、自分たちの地域の買い物環境を守りながら支援を行う視点も大切になってくるのではないのでしょうか。

身近な小売店が減少する傾向にある中、買い物支援には、商業振興と併せた取り組みなど、新たな分野との連携による支え合いや見守りが期待されています。

（市町村協賛 福祉ボランティア活動支援担当）

神奈川県立保健福祉大学
准教授 中村 美安子



「今の時代に合った見守りとは」

いわゆる「見守り」は、近所付き合いなど普段の暮らしに組み込まれているものです。こういった自然に見守り合える関係づくりが地域福祉の大事な柱でもあります。ところで最近は、見守りに改めて取り組もうとする動きが活発です。一人世帯が増え孤独死等の報告を聞くにつけ、自然な見守りのヌケモレやムラに気づかされ、それを補うサポートを別に組み立てなければいけないと多くの人が思い始めたからかもしれません。見守りは単体では提供し難いものです。そこで、その人が受け入れ易いものに組み合わせ提供しようという発想が生まれます。配食サービスはその代表例でしょう。ホームヘルプも以前はむしろその目的で提供されていたさきらいがあります。昨今は買い物支援が注目です。見守りを受ける側が抵抗なく受け入れることができるような、今の時代に合った「見守りサービス」の開発が求められているのではないのでしょうか。